

# 大陸（中支）

## 想い出の軍隊生活

愛知県 和田敏雄

私は昭和十七（一九四二）年二月一日、中部第六部隊騎兵隊に現役兵として入隊しました。名古屋で育った私には、騎兵隊などと言った馬のお世話をしなければならぬなどは、不安でなりませんでした。

ここ中部第六部隊にいたのは入隊後約十日間位で、二月十一日には第一線要員として名古屋駅を出発、門司港より朝鮮釜山に上陸、さらに鮮満国境を通過し、北支の平地泉と言う所へ向かいました。

た。北支のこの地方の二月頃の気温と言えば零下三〇度、用便をすると終わらないうちからツララとなってしまう程の寒さでした。内地では到底考へも及ばぬ光景でした。

列車から下車した私達は隊伍を整え、原隊のある平地泉へ、歩いて約一時間で駐屯している部隊に到着しました。直ちに編成となり、私は第二大隊第三中隊第一班に編成されました。

ここで軍隊の第一期教育を受けました。当時、軍では第一線において警備並びに即戦闘要員としての初年兵教育を行ったのでした。

捜索隊としての教育を受けましたが、その後捜索隊なるものは解散して、一期検閲終了後に大同無線通信教育隊平地泉通信所勤務を命ぜられ、各

部隊との命令伝達等の任務に従事することとなりました。この付近には八路共産軍が出没し、度重なる戦闘が展開されていました。北支では特有の黄砂現象があり、西方の砂漠の細かい砂が、強い西風に煽られて黄塵万丈と言いか、眼も口も開けられず、まるで黄粉にまぶれたようになります。

そして教育演習や討伐から帰隊すると、初年兵は、われ先にと班長や助手の脚絆を解き、小銃、軍靴の手入れをしてやるものです。班長や助手はまるで神様扱いで楽でよろしかったでしょうが、初年兵にとっては大変な仕事でした。そして班内に戻れば、古参兵の銃の手入れから洗濯物を、そして自分の物と、まったく手が廻らぬ超多忙でありました。その為自分の銃の手入れや点検、被服の手入れなどには落ち度が出て来ることもありま

す。  
また軍隊では員数観念というものと、兵器等は常に点検をして置くというのが重視されています。

た。ある時、演習より帰隊し、銃の手入れをして、銃口を研ぐ放銃口の差し入れ方向が間違っ

て、銃口を研ぐ放銃口の差し入れ方向が間違っ  
差し込んだままにして銃架に立てて置いたことが  
あります。明朝演習に出て、「休暇」「組め銃」と  
なったのですが、放銃口がないので、我が分隊だ  
けが「組め銃」ができない。教官から「一分隊、  
どうした」と言われました。助手の方は「ハイ！  
放銃口が悪いので修理に出しました」と言って、  
その場は教官も察して「了解」となったのです  
が、演習が終わって帰隊したら早速全員訓示とな  
り、点検と言う事を忘れた罪でビンタのお見舞を  
もらったのでした。  
教育中には、このように意地悪のようなことを  
しながら点検の重要性というものを教え込まれた  
のでした。今思えば軍隊で教え込まれた点検の重  
要性というものは現代社会においても重要です。  
原発の点検、農薬の点検、その他すべての事柄に  
通用される問題だと考えさせられます。余談にな  
りましたが、私は今度は戦車第十七連隊へ転属と

なりました。

五月初旬、戦車隊の訓練も、まだ日浅いまま唐山地区へ進撃、また河南作戦へと出動しました。

大黄河の大鉄橋長さ三、六〇〇メートルを渡河、鄭州に集結し次なる作戦命令を待っていました。

敵の大軍が守備している前方の小高い山が羅王城です。許昌攻撃に当たっては、我々戦車部隊は城門の突入に大活躍をしました。しかし敵は我が戦車部隊の進路を防ぎ、道路、橋架、畑にまで至る所に地雷を埋設しており、うっかり進撃はできないため、工兵隊の支援によって埋設された地雷を撤去してもらったの進撃でした。何分隊の戦車だったか、河の手前の橋架近くを進撃していたら突然「ドドン！」と爆音が聞こえました。我が隊の戦車一輛が地雷を踏んでしまったらしく地上三メートル位吹き飛ばされてしまいました。勿論、兵隊も戦死です。周囲にはまだ残敵がおり戦車から出る事もできず、敵の敗走するのを待って、事後処理に当たることとしました。

許昌を占領した我が軍は、敵主力を殲滅すべく、進路を西に急転して臨除へ行進し、再び北進して洛陽へと向かいました。

洛陽の手前の竜門街と云う所は、数条の鉄条網で囲った堅固な陣地でした。この攻撃では、我が戦車隊も、敵の砲弾で大なる損害を受けました。

この戦闘は工兵隊、歩兵に協力しての激戦でした。それに加えて我が戦車隊は敵機の絶好な攻撃目標であるので、昼間は林の中で遮蔽して、夜間に前進をするといった状態なので、埋設されている地雷の危険に気を配りながらの前進でした。漢口を経て更に長沙へと進軍して行きました。

数々の戦闘において私達の戦友の半数近くも戦死し祖国の地を踏む事ができず、広漠たる砂漠の地に眠ったのかと想うと、何ともいい表すことのできない気持ちでした。

「湘桂作戦」での第三次長沙作戦では、私共が長沙の街へ入城する前に日本軍主力が突入してい

ましたので、敵の抵抗も無く入城することができました。

戦地では「生水は絶対に飲むな」と注意されていたのですが、砂埃が口の中に入ったので、休憩の時、近くを流れる小川で口をすすいたので、翌日の朝頃からアメーバー赤痢にかかってしまいました。

二十分置き位に水便を排便するので、疲労は重なるばかりでした。そんな時、同年兵の山田君が出征する時持ってきたのだと云って「熊の胃」を出して飲ませてくれたのです。ところが不思議にも、あれだけの下痢も、びたりと止まったのです。病院の薬でも中々止まらない下痢が、私はこの「熊の胃」のために命拾いをしたと云っても過言ではなかったのです。

「山田君！ 有難う」と私は手を合わせて礼を云ったのです。後で判ったのですが、かなりの兵隊がアメーバー赤痢にて病院に入院となり、遂には戦病死となったという話も聞かれました。幸

い私はこの病院にも無い「熊の胃」のお陰で助かったのだと今でも忘れることはできません。

長沙に入ったのは昭和十九年九月中旬だったと思います。街に入ったら至る所に敵の死骸が横たわっていて、攻略戦の厳しさを物語っていました。

各部隊が、それぞれ長沙に集結して来ました。何と云っても第一線はまず食糧の調達です。宿营地を決め、そして何キロも先までも現地調達のため探して歩き、糶を見付けてビンの中へ入れ、棒で突いて玄米にして、これを食べるという状態でありました。悪い事とは知りながらも、現地の農家から鶏や豚等を副食に頂戴できたら上々の方です。大部隊の通過したあとにはほとんど、食べる物資は残されていません。

自分達は長沙から少し離れた部落に宿営することとしました。毎日の雨で山や谷間は悪路です。我々小隊はようやく見付けた糶で玄米食として、

幸い見付けた豚一頭で、小隊全員でスタミナ補給ができた喜びました。そして民家の土間に藁を敷いて休眠をしました。まるで豚小屋同様です。

その夜は長い作戦行動の疲れで深い眠りに入り、朝になるのも判らない程でした。

その時「タタタター」とまるで豆鉄砲のような音がしたので眠りが覚めたのです。「おいあれは何の音だ」と話をしている時、「敵だ!」と云う声に驚いた我々は、早速外には出ては見たのですが、小銃とて分隊には三丁位しかないのです。他の分隊の早い者が戦車に飛び乗り、機関砲を射ちまくったのです。それで敵も退却の気配を示し、銃声も聞こえなくなつたので、ひとまず宿舎の中に戻り朝食の準備をしました。ここで次の作戦準備のため、十日間ほどの休養ということになりました。

さて頭のいたいことには、これからの糧秣確保です。後方からの糧秣補給はほとんど望めない、

何と云っても現地調達しかない。各分隊は数キロも先の部落を探して歩けども一粒の米も残されてない。

足を棒にして山道を歩いていたら、左の方向に、岩塊が重なっていて、その間から細々とした煙りが立ち上っている。「あれ変だなあ」と思つて近づき、大きな岩を皆でどかして見ると一人が出入りできるぐらいの穴がぼっかりと見え、その下から白い煙りが出ているようです。「おい。

この穴の下から煙りが出ていることは中に誰かいるということだ、誰か中に入ると云う者はいないか」と云つても誰も自分が入ると云う者はいない。たしかに穴の中にいるのは敵兵なのか部落民なのか分らないからだ。

先任であった自分は「よし、俺が入って見るから外の様子は警戒してしてくれ」と云つて、薄気味悪い気持ちではあったのですが、穴の中へ入って、下って行くごとにかなり広い鍾乳洞となり、真暗い中の所々に小さな灯りがあるだけで、そこ

に数人かの現地人と思われる老人風の人がいる様子でした。まさかここまで日本兵が入って来るとは思わなかったのだらう。皆おびえて小さくなくて震えているようでした。

片言の中国語を話しても答えてくれない。仕方がないので薄暗い洞窟の中を探し廻ったら、奥の窪みのところに、袋に入った米を見付けたのです。約十キロあったと思う。その間約三十分、喜び勇んで入口に這い上がってきたら、外にいた連中は、私が穴の中へ入って三十分も経過しても出てこないの、中で殺られたのではと、心配していたと云う。

足を棒にして歩いても糲の一粒も見付けることができなかったのが、十キロもの米を見付けて上がって来た自分に、一同ただただ感謝の念でいっぱい「良かった、よかった」と喜び合い、疲れ足を引きずりながら宿舎へと帰ったのでした。

こうして分隊長は、しばらくぶりの白米飯にあ

りついたのでした。我々はこの先、このような生活をいつまで続けなければならぬのか。畑の中も部落の家々の中も食糧などすべて取りつくされて目をおおうばかりに荒れ果て、まさに「荒漠千里、悲風流れ行く」という情景でした。

今にして思えば、戦友の絆が、これほどまでに強く結びつけられているとは思ってもしなかつた。数々の苦勞を共にしたこともさることながら、戦争と云う、異様な極限の世界がはぐくんで来た戦友の絆だと思ふ。私の脳裏から離れることのできない幾多の戦友の半数以上が、再び生まれ故郷の土を踏むことができずに異国の地に眠ったことを思うと、戦争と云う悲劇は二度と味わいたくない。そして恒久的に我々子孫にも経験させてはならないことを祈っております。

そして亡き戦友の冥福を祈るのみです。